

1. The Current Situation of Neglected Tropical Diseases (NTDs) through the Overseas Training Program in the Philippines

¹⁾ 医学部3年, ²⁾ 基本医学語学・人文教育部門,
³⁾ 熱帯病寄生虫病学, ⁴⁾ 国際環境衛生室
小田切誠也¹⁾, 鈴木健生¹⁾, 伊藤大喜¹⁾, 木戸梨沙¹⁾,
郷間丈滉¹⁾, 下田実果¹⁾, 平松里菜¹⁾, 鱒淵 明¹⁾,
坂口美知子²⁾, 千種雄一³⁾, 大平修二⁴⁾

平成30年7月22日-8月4日にかけて、フィリピン共和国における海外研修に参加した。「顧みられない熱帯病 (NTDs)」について学ぶ機会が多くあり、特に日本住血吸虫症の現状について注目した。

顧みられない熱帯病 (NTDs)

NTDsとは熱帯及び亜熱帯の149カ国において蔓延している17の感染性疾患である。「顧みられない」とされるのは、身体に深刻な障害や変形をもたらすが致死性ではないこと、発展途上国の貧困層に罹患者が多く、治療薬も安価であるため、製薬会社にとって低収益であること。これらの理由から、NTDsは歴史的に注目されず「顧みられない」病とされてきた。

日本住血吸虫症

住血吸虫症はNTDsの1つであり、日本住血吸虫をはじめとする住血吸虫類により引き起こされる寄生虫疾患である。日本においては既に根絶された疾患であるが、フィリピン共和国では1200万人が感染の危機にあり、現在も公衆衛生上の大きな問題となっている。日本住血吸虫はミヤイリガイを中間宿主とし、貝から水中に遊出したセルカリアが経皮的にヒトやその他の哺乳類に感染し、腹痛や肝脾腫などを引き起こす。フィリピン共和国での感染経路は、汚染された地域における裸足での農作業や、川遊びなどが主である。

有病率減少に向けた対策

フィリピン共和国保健省が主導し、これまで駆虫薬の集団投薬、トイレの設置、中間宿主の駆除、定点観測や衛生教育が行われてきた。現在は集団駆虫が主要な対策となっている。集団駆虫は効果的であるが、集団駆虫参加率は高いとは言えない現状がある。日本における根絶の歴史を踏まえると、衛生教育などのソフト面の対策強化も今後重要であると研修を通じて感じた。

2. City of Hope : medical consultation management systems

¹⁾ 医学部5年, ²⁾ 語学・人文教育部門
古木佐保里¹⁾, 佐藤紗百合¹⁾, 音山友里恵¹⁾,
田中佑宜¹⁾, 成 東華¹⁾, 趙 顕一¹⁾, 飯塚秀樹²⁾

【目的】限られた時間の中で充実した全人的ケアを行うためにはどのようにすればよいのかをCity of Hope (以下COH) の診断から治療の流れにおける工夫から学ぶ。

【方法】アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスにある、がん拠点病院COHの御協力を頂き、COHの診療の流れについて多様な職種の講師から講義と実習を行っていただいた。

【結果】COHにおける診療の流れは以下のとおりとなる。まず、患者の治療適応の有無を判断し、必要な場合、患者専属のアシスタントであるPatient Navigatorが患者とパートナーに治療に関する案内を行う。次に、患者とパートナーに対してSupportScreenというアプリケーションを用いてケアを希望する範囲と目標を決める。そして、Couples Programを用いて患者とパートナーに対し医療教育と心のケアを行い、その結果得た情報をCouples Programの臨床医が医療チームに伝える。その後、患者とパートナーは医師と面接し、治療が始まる。治療後はSupportScreenを用いて満足度を患者に評価してもらい、全ての情報はデータベース化される。このように多職種が連携することによって医師は治療に専念することができる。

【考察】アメリカは多様な言語や文化で溢れているため医療に対するニーズも幅広く、多様な職種が強く連携することによってニーズに合った医療が提供されている。日本とアメリカでは医療制度も価値観も異なり、アメリカのシステムをそのまま取り入れることや、同様の効果を得ることは難しいであろう。しかし、COHの診療の流れにおけるSupportScreenやPatient Navigatorといったシステムは、患者のニーズを的確にとらえるだけでなく、医師や看護師たちの業務負担を減らし、より質の高い医療を実現する手がかりになり得ると考えられた。

【結論】医療に求めるニーズが日本以上に幅広いアメリカにおける最先端の診療の分業化や効率化は、日本とアメリカの社会制度や文化の違いを差し引いても取り入れるべき点があるということがわかった。